

中国人の家族構成願望の心理分析

時 蓉 華* 東海林 靖 子*

How the Chinese View the Family

Shi RONG HUA* and Yasuko TOHKAIRIN*

Does one prefer to dwell with the rest of one's family? What does one expect of other family members? What does one find distasteful in the family setting? The answers to such questions and others as to how family life should be differ among constituents of a family, be it husband or wife, children or parents.

In an issue such as this one, the relationship between a married couple and their parents is of the utmost importance. This relationship bears great influence on the emotional stability of all family members as well as on their work or academic performance.

We investigated the expectations the Chinese hold toward family life in this study. A questionnaire was administered to residents of the city of Shanghai to investigate their preferences on living together or apart from parents, their views on the advantages and disadvantages of living together with the family, their expectations of other family members, their sense of duty on supporting their parents.

The differences between parents' and children's desire to live together and the contrast between such desire and the unpermitting conditions of life were prominent as results.

Key Words: family, family member's desires, questionnaire survey

調査の主旨と概要

いわゆる家族構成とはすなわち夫婦、血縁者、親族などを指す。それらの家族メンバーの組み合わせモデルはそれ自体その当時の社会の経済の発展と伝統観念の影響を受け、また人々の心理的な制約ともなりうる。家族構成は、家族構成メンバーの心理的面にも大きな作用をもたらす。社会が混乱し不安定になると人々の心もおちつかなくなり危機感が発生する。

これと同じことで、ある家族内でメンバーがお互いを排斥し攻撃しあうとすれば、これもまた人に警戒心と不安感を抱かせるであろう。

このようなことは心身の健康に対しても良くないことである。高齢者は退職後、家庭がその重要な生活範囲となるのであるから、もし家族の間がとても和気あいあいとした和やかな雰囲気であれば、彼らの健康や長寿に対しても有益であろう。又壮年層、青年層のメンバーも住む家庭において、もしお互い

* 華東師範大学 心理学科

Dept. of Psychology, East China Normal University

注 本論文の翻訳には、東海林が当たった。

に心からうちとけあいお互いを思いやり、後顧の憂いがなければ、彼らの仕事また学業や心身の健康に対しても有益であろう。

目下、存在する家族構成形式は、客観的原因、例えば住居条件等によって、あるいは主観的要因、例えば人間関係などによってつくられる。家族構成の願望は、それ自体が一種の潜在的な力を持ち、もし一旦客観的条件がそろいさえすれば、それはすぐにも家族構成を変化させる一種の主要な動力となりうる。本研究の目的は、人々の家族構成の願望に対する調査において、異なる家族構成の人々の心理に対する影響を分析し、理想的な家族メンバーの組み合わせを考え、人間関係が円滑に進むような情報を提供し、都市住宅の合理的設計を心理学を根拠として提供し、中国特有の人間関係理論をうちたてることを旨とする。

家族構成の分類は、一般に次の4つに分けられる。1つは独身家庭、そして核家族（夫婦2人の小家庭を含む）、主要家族と連合家族の4つである。我が国の目下の社会に主に存在するのは核家族と主要家族の2つである。この研究もこの2つの種類の家族構成に対する願望の調査を主とし、そして老若両世代の同居とまたは別居に対する態度をもあわせて見てゆく。

調査は2度にわたって行った。第1回標本抽出法調査は企業に勤める55～65歳の子供をもつ層と、35歳前後の父母と子供の両方をもつ層それぞれ110名、計220名男女半々で行った。主な質問は、年齢が高い層には子供との同居または別居を望むか、年齢が低い層には子供との同居または別居を望むか、もし別居できずどうしても同居しなければならないとしたら、年齢の高い層は息子とその嫁との同居もしくは娘と娘婿との同居を望むか、年齢の低い層は自分の両親との同居を望むかまたは配偶者の両親とのそれを望むか等である。回収された有効回答は193票、77.10%を占めた。

第二次標本抽出法調査は、上海市民800人、年齢層は20歳～65歳にわたった。主に次の二方面に対しての資料を収集した。小家族メンバーの組み合わせの弊害と利得そして大家族メンバーの組み合わせの弊害と利得である。合計有効回答は583票回収された。これは全体の72.09%を占めたことになる。この調査で回収時には密封式の封筒を用い、回答済みの回答

用紙をそれぞれに入れ提出してもらった。調査項目ごとに均等にいくつかの選択される答えを設け、正確に事実に基づいてそのなかの一つに印をつけ回答するよう求めた。

本調査の結果

1. 家族構成の願望

家族構成の願望について実際に両世代の同居と別居に対する態度の問題について表示する。

(1) 子供側から見ると、48%の男性と65%の女性が両親との別居を希望した。その他は同居を希望している。比較してみると女性の方が男性よりも両親との別居を多く希望している。表1参照。

表1 若年側（子供）の家族構成に対する願望

子供側	高齢者側（親）との同居	高齢者側（親）との別居
男性	52% (31人)	48% (29人)
女性	35% (21人)	65% (39人)

(2) 両親の側から見ていくと、40%の男性と57%の女性が、子供たちとの別居を希望した。他は同居を希望している。比較してみると女性の方が男性よりも子供との別居を多く希望している。表2参照。

表2 高齢者側（親）の家族構成に対する願望

親側	子供との同居	子供との別居
男性	60% (36人)	40% (24人)
女性	43% (26人)	57% (34人)

表1と表2をまとめて見ていくと、両世代の家族構成に対する願望について、子供の側は両親との別居を両親側よりもさらに希望し、それに対し両親側はとくに男性は子供との同居を望む傾向が見られた。

(3) 子供側が自分の両親か或は配偶者の両親との同居を選ぶかという態度において、47%の息子と80%の娘は自分の両親との同居を望んだ。その両者の差異ははっきりしている。これら子供側の配偶者の両親との同居に対する態度で同意すると答えた割合は男女ともに少なく、またその両者の数字は接近している。男性は18%で女性は14%である。これら子供側のうち、どちらでもよいと答えたのは男性が多く35%、女性にいたっては僅か6%であった。表3参照。

表3 子供側が親側との同居に求める条件

子供側	自分の両親との同居	配偶者の両親との同居	どちらでもない
男性	47% (28人)	18% (11人)	35% (21人)
女性	80% (48人)	13% (8人)	7% (4人)

まとめていえば、子供側は男女ともに自分の両親との同居を望む傾向がある。とくに娘側がはっきりとその態度を表した。

(4) 両親側の自分の娘と娘婿あるいは息子と嫁とのどちらとの同居を選ぶかという態度において、娘と娘婿との同居を望む傾向が見られた。またその数字も高く、63%と60%と高い。表4参照。

表4 親側が子供側との同居に求める条件

親側	娘と娘婿との同居	息子と嫁との同居	どちらでもない
男性	63% (38人)	37% (22人)	**
女性	60% (36人)	40% (24人)	**

表3と表4をまとめて見ると、子供側、とくに娘側が自分の両親との同居を望み、両親側は父親も母親もともにそのほとんどが自分の娘と娘婿との同居を望んでいる。これは両者の希望がこの項目については合致したといえるであろう。

2. 両親と子供の同居の利害と弊害の分析

(1) 両親と子供の同居の最大の長所

調査で得られた資料から、調査に回答した人々が両親と子供の同居の最大の長所は、生活においてお互いに世話ができることであると認めている。それは全体の2/3を占めている。それに次いで、両親側が家族の団欒を享受できるということだとしている。これは全体の約1/5を占めている。その他回答があった三つの答えについては、全体に占める割合はきわめて少なく、どれも5%をこえていない。図1参照。

(2) 両親と子供の同居における矛盾の主要原因

調査から得られた資料からわかることは、思想観念の違いが、両親と子供の同居の矛盾の発生の第一の原因である。その次の原因については住居のキャパシティの問題、続いては性格の不一致が上げられる。そのほかの幾つかの原因はたとえば、生活の要求の違い、文化修養の差異、経済負担の差からの家事の負担の不均衡など、これらはいずれもその矛盾発生の主要なものではない。表5参照。

表5のこの資料は二つの問題について説明し

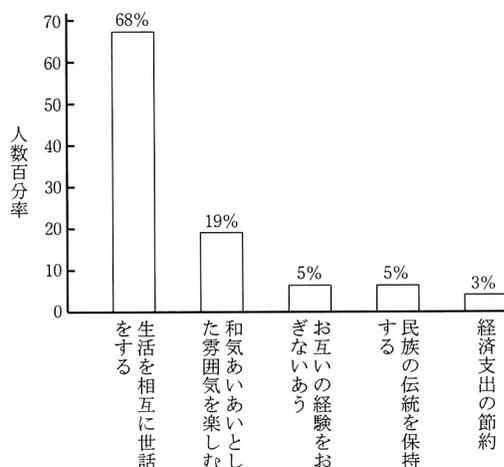


図1 親と子の同居の利点

表5 親側と子供側の同居に伴う衝突の主要原因

順序	衝突発生の主要原因	選択者数	%
1	思想・考え方の相違	192人	33%
2	住居が狭く窮屈	152人	25%
3	性格の不一致	122人	21%
4	生活要求の相違	70人	12%
5	文化強要の差異	29人	3%
6	経済上の不満	12人	2%
7	家事分担の不満	6人	1%

ている。ひとつは同居する両親と子供との間に発生する衝突の主要原因および、人々の精神上、観念上からの心的距離の拡大、たとえば上海市内の住居は狭く当然これが原因で衝突が起こることもある。しかしそれは間接的な原因に過ぎない。二つめは思想観念の違いである。これはその他の原因とも関連する。なぜなら人々の生活の要求、経済配置および家事の分担など、すべて一定の思想観念に基づいている。それらと思想観念を比べると、その地位からくるものもある。

(3) 同居において両親と子供側とが相互間に希望するもの。

両親と子供の同居についてお互いに希望するものという調査において、次の幾つかの点にまとめることができる。

① 両親側は、子供達との心の交流を最も求めている。同時に子供達が自分達を尊敬し、礼節をつ

表6 同居している親側と子供側が相互に相手側に求める内容

順位	親側が子供側に対し			子供側が親側に対し		
	最も望むこと	人数	百分率	最も望むこと	人数	百分率
1	お互いを気にかける心の交流	251	43%	趣味に関心をもつ子供側を尊重してほしい	268	46%
2	自己の尊重礼儀を尽くす	140	24%	経済方面で争いを避ける	116	20%
3	経済方面で争いを避ける	99	17%	家事の手伝い子供の面倒をみる	93	16%
4	家事の手伝い生活上の手伝い	76	13%	夫婦喧嘩に干渉しないこと	76	13%
5	物品のプレゼント贈物の贈与	17	3%	飲食について高い要求をしない	29	5%

くしてほしいとも思っている。この2種類の希望は、全体の2/3を占めた。(43%+24%)

② 両親側は子供に対し経済方面、家事労働方面の援助をそれほど求めていない。両者とも1/3をこえず、物質面での援助を最も強く希望したのはわずか3%に過ぎない。半数近く(46%)の人々が子供達から自分の趣味の方面において尊敬してほしいと答えた。経済方面と家事労働方面に関する要求はわずか全体の1/3を占めたにすぎない。表6参照。

資料から、ひとつの問題が説明できる；両親側であろうと子供側であろうと、彼らの同居において、自分の落ち着ける場所の要求と尊重されることの希望をとっても重視している。さらに物質上の要求は、自己が準備すべき基本的条件としている。既に得られた異なる程度の満足は、お互いの関係のなかでは主要なことではない。

3. 両親と子供の別居の得失の分析

(1) 両親と子供の別居の最大の長所

調査を受けた人々のうち40%が認めるのは、両親と子供の別居にはお互いに気兼ねすることがなくて

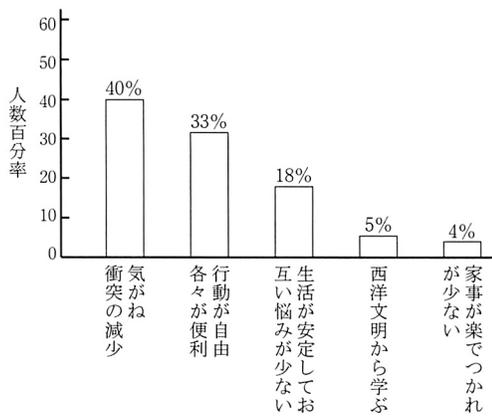


図2 親と子の別居の利点

すむと答えている。33%の人々は、お互いに行動が自由で便利であると答えている。18%の人々は、お互いの生活がおちついていて、干渉しあわずにすむと答えている。この3つが大部分を占めた。これはまさに調査をうけた人々が、別居の長所を考えると、主に両親側と子供側との双方の精神的な安定ということから着想しているということを反映している。図2参照。

(2) 両親と子供の別居の最大の短所

調査を受けた57%の人々が両親と子供の別居の最大の短所はここにあると答えている。すなわち別々に住むことは両親側、高齢者にとってもさびしく孤独であり、家族の温かさが欠乏する。33%の人々が、両親と子供の別居は子供達の年老いた両親に対する世話が周到に行うことができず、健康に影響を与えてしまうと答えた。この2つは回答全体の90%弱を占めている。これは調査を受けた人々が主に年老いた両親側からこの問題を答えたことの反映であろう。図3参照。

(3) 別居している両親側と子供側が相互に希望していること

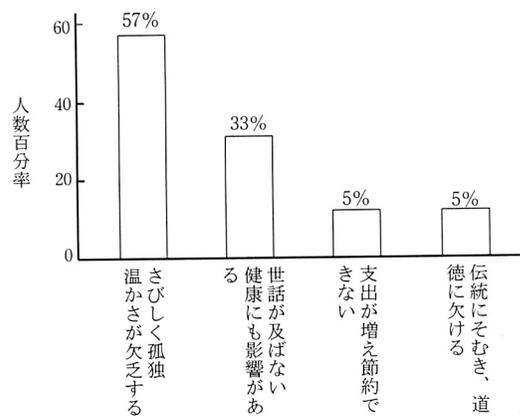


図3 親と子の別居の欠点

得られた資料から、主なものとして以下のいくつかにまとめられた。

① 80%の調査を受けた人々が、子供と別居している両親が、子供達がなるべく頻繁に訪問してくれることを望んでいると答えた。これは全体の大部分を占めている。これに対し両親側が、子供達に家事の援助を希望し、経済的にも助けを受け、品物を送ってくれるよう希望する、というこの3方面に対する回答は合わせてもわずか17%を占めるにすぎなかった。これらの数字から、子供と別居する両親達の子供達に要求することは、感情的な方面に集中しているといえるであろう。満足したいと求めている事柄は、年老いた両親達が最も渴望していることでもある。

② 両親と別居している子供が最も望んでいることは、父母自身体を大切に、なるべく病気にならないで欲しいということである。これは調査を受けた人々の52%の意見である。各20%ずつの調査を受けた人々が答えるには、子供達は、両親になるべく頻繁にたずねてきてくれるように、そして生活上の知恵を与えてくれ、意見を出してもらい、多くいろいろなことを教えてくれるようにと希望している。経済的援助を希望したのはわずか5%を占めたにすぎない。これらの数字は両親と別居をする子供達の父母に対する関心と、尊重とを説明している。

③ わずか3%の調査を受けた人々が、別居をした後、なるべく行き来をしたくないと答えた。これはおそらく現実生活の中に存在するある状況によるものであろう。現実には確かにごく少数の両親側、或は、ある理由によって双方が多く連絡をとりたがらないという人々もいる。

表7には、別居をしている両親と子供達のお互いの希望の具体的な数値があげられている。

考 察

年老いた両親と子供との同居がいいのか、もしくは別居がいいのか。これは本研究の中心議題のひとつである。家族構成問題の探索は、歴史的に見ても家政学、社会学、心理学の専門家たちも注目してきた問題である。また、あらゆる社会の人々が立ち向かってきた問題でもある。同居あるいは別居、それは人々の願いによってのみ決まるのではなく、現実の条件によっても決まる。例をあげれば、住居条件によって同居、別居が制限されることはよくあることである。本研究は主に社会心理学の立場から分析を加え、自己の考えを提出し、拙論からより良い意見を引き出せることを切に望む。

(1) 小家族の方が大家族よりも家庭内の人間関係を処理しやすく、家庭メンバーの心理と身体の健康を促進させることに有益である。

すでに発表された研究において、家庭内の人間関係の複雑さは家族の人数に正比例するという。社会学において、かつてあげられた一つの公式で、これを用いて家族人数の家庭内の人間関係への影響を表すことができる。公式は $(N^2 - N) / 2$ 。Nは家庭人数を指し、もし家庭が3人で構成されているとすれば、既存のNは3、したがって3種類の関係が存在することになる。N = 4の場合は、6種類の関係が存在することになる。N = 5の場合は、10種類の関係が存在することになる。これにより人数が多ければ多いほど、存在する関係も多くなるといえる。この他、家庭内人間関係もこの家庭世代数と関係がある。典型的な小家族は二世代で計3人、大家族は三世代で計4、5人、あるいは、さらに多くなれば、世代数ももっと多くなる。そして人間関係もさらに多くなる。図4参照。

家庭内ではいつもメンバー間において相互作用が

表7 別居する親側と子供側が相互に相手側に求める内容

順位	親側が子供側に対し			子供側が親側に対し		
	最も望むこと	人数	百分率	最も望むこと	人数	百分率
1	頻繁な行き来お互いに気に掛ける	467	80%	からだを大切に病気にならないこと	268	46%
2	生活洋品の購入、家事の手伝い	41	7%	意見を出してほしい、指示がほしい	116	20%
3	経済方面の援助	35	6%	生活上の手伝い	93	16%
4	物品を多く買いあたる	25	4%	経済面の援助	76	13%
5	各自の生活尊重、行き来を少なく	17	3%	各自の生活尊重行き来を少なく	29	5%

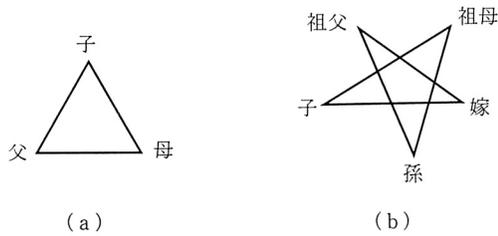


図4 家庭人口数と家庭の人間関係

発生している。三つの世代において彼らの年齢、性格、思想観念、生活様式など各方面において差が見られる現在の条件下で、物質生活と精神生活ともにあまり豊かでなければ、衝突が発生するのは避けがたく、それにともない、いたずらに人々の苦悩と不安が増長し、心理上のアンバランスを生み出してしまう。もし老父母と子供が別居すれば、お互いに“気がねがない”“自由な行動”“不干涉”が得られる。これは本研究の約90%の調査を受けた人々が認めるところであり、また両親と子供の別居は彼らの健康と長寿に有益であるということの意味するものでもある。これは恐らく理にかなっている。しかもこれは多くの子供側が受け入れているということだけのことでなく、また相当数の両親側も要求するところである。

10年前、天津で行われたある調査によると、年老いた両親たちが子供との別居を希望する割合は38.9%と多数を占めた(劉炳福 1986⁶⁾)。

大家族において、必ず避けられない一つの大きな問題にぶつかる。すなわちそれは嫁姑の問題である。我が国の伝統思想はわりと深く根付いており、老父母たちは比較的、息子とその嫁と多く暮らしている。ある人が1200家庭を対象に調査をしたところ、この問題において嫁姑の関係がうまくいっていると答えたのは、わずか2戸だけであった。これはおそらく特殊なことであろう。私たちは7、8年前に108名の姑と75名の嫁に対して調査を行ったところ、結果は1/4の嫁姑が、関係はわりとうまくいっていると答えた(時蓉華 1986^{2,3)})。164組の夫婦を対象に調査したところ、その結果、3/4の夫婦の関係がうまくいっているという結果を得た(時蓉華 1988⁴⁾)。786名の青年男女に対する調査で4/5の人々が父母と感情の面でもお互いの関係は良好と答えた。最近の天津市で9万強の高年齢層の住民を対象に行われた調査で、

家族構成の願望についてその結果は7万強、75%を占める人々が若年層との別居を希望した。そして老人2人もしくは老人1人での独立生活を希望した。以上、いくつかの家庭内人間関係の比較から、嫁と姑の関係がいちばん難しいといえる。嫁姑関係の衝突あるいはこの関係を避けるための別居はおそらく客観的な態度、傾向といえるであろう。多くの高齢者たちが子供の援助と関心を欲している。これは離れて暮らしている高齢者と子供にはさらに切迫したものであろうし、また大家族のほうがこの問題に対しては有利である。しかしどのような物事にも二面性がある。この問題に対し、得失をはかり比べようとすれば、双方の願望とその他の条件などから総合して考えなければならない。しかし、総じていえば、別居は双方にとって心の安定と平静を保つのに有効であり、お互い縛られることが少なく、自由も比較的多い。いうまでもないことだが、別居をしている子供は父母を扶養する責任というもの同居している彼らと比べて少なくてすむ。

(2) 家族構成に関連する父母に対する子供の扶養問題について

人は生まれてから幼年期を経て児童期を過ごし、青年、壮年と経て最後に老年期に至る。これは自然で普遍的なことである。そして高齢者は尊敬と扶養とを受ける。これは彼らの権利であり、次世代の者の義務である。またこれは社会倫理、道徳のとても良い伝統である。伝統的社会においては年老いた父母の扶養は完全に家族に依存していた。だが社会の発展と進歩にともなって、家族構成も大きな変化をみせた。家庭の規模はますます縮小し、大家族はどんどん核家族化していった。家庭内で若い人々は老人メンバーから離れ、核家族を構成し、高齢者たちだけで暮らすようにさせ、老夫婦、小家族を構成させていった。下に一つの我が国の目下の都市部の家族構成の傾向、および小家族が占める割合を示す資料をあげておく(1990年第4回全国人口調査1%抽出による数字)。表8参照。

表8 我が国の主要都市の家族構成分布

家族構成	北 京	上 海	天 津	成 都	広 州
核 家 族	59.71	55.18	65.03	67.65	67.46
主要家族	14.40	19.84	12.79	16.46	20.11
そ の 他	25.89	24.98	22.18	15.89	12.43

台湾のある調査によると(陳政寛等 1986⁴⁾)台湾地区の家族構成の分布は核家族が57.77%を占め、主要家族は35.46%を占め、その他は6.77%であった。

上述の資料から我が国のいくつかの大都市部においては核家族のほうが主要家族よりも多く見られる。だが上海では他の都市よりも少ない。これはおそらく居住条件が制限されているということが主要な原因のひとつであろう。どんな構成の家庭であろうと、子供は老父母を扶養していく義務がある。大家族のなかの高齢者は子供たちの世話を受けられるが、それでは別居して暮らす人々は子供たちの世話を受けることはできないのだろうか。ここにはっきりさせることを必要とする二つの問題がある。ひとつは扶養の内容、二つめは父母たちが子供たちに対してどのような扶養を望んでいるのか、ということである。

扶養とは多くの次元、多くの段階をもつものである。アメリカの人間性心理学のマスロー(Maslow, A. H.)の理論によれば、人間は5つの基本的な欲求があるといわれている。すなわち生理的欲求、安全欲求、社会欲求、尊重欲求と自己実現欲求である。前出のうち、はじめの二つは低次元のものであり、後の三つは高次元のものである。高齢者についていえば、彼らは社会的関心と尊重とを切望している。とりわけ子供の関心と尊重を望み、それをもって彼らが退職、引退した後、失ったものを補おうとする。本研究の調査資料もこの点を説明している。いまの段階では、大多数の都市部の高齢者たちが最も必要としているものは物質上、あるいは肉体的なことではなく、精神上的なことである。上述の上海における調査結果が表しているが、子供たちと同居している高齢者が最も望むことは、子供たちが自分に関心を払ってくれること、自分を尊敬してくれることである。子供たちと別居している高齢者が最も望んでいることは、子供たちが頻りに訪ねてきてくれ、心の交流があることである。都市の高齢者たちは皆、退職金と公費医療とを受けている。身体に対する健康条件はよく整っている。そのため、子供たちは精神上的の満足感を与えてくれるよう求める。これは、高齢者たちにとっていえば、子供たちは精いっぱい精神上的のことを尽くす義務があるということを示している。

歳とともに体力が衰え、病気になりやすくなる老父母に同居別居を問わず子供たちはその生活を世話

する責任がある。これは当然のことである。ただし、これにも問題がある。なぜなら現代の若者の世代は皆、共働きである。また就学児童をもっている夫婦もいる。彼らは朝から晩までとても忙しく、仕事が終わればまた研修などがあつたり、子供を教育し三食を与えなければならず、老父母に対する義務を果たすことはとても難しい。そのため社会の高齢者事業を発展させる必要があり、これをもって彼らの不足を補うべきである。実際に社会の対高齢者の扶養問題に関してたくさん解決しなければならない課題が存在する。高齢者対策は後延ばしにしてはいけない。一方では、各種の高齢者生活のサービス機構が上げられている。たとえば、高齢者サービス要員、高齢者の衣食住に対するヘルパーなど、これをもって子供側の問題を解決している。その他、高齢者文化センターやクラブなどの類いの文化施設を設立し、高齢者の社会との結びつきを強め、積極的に人と交際し、趣味を發展させ、文化的にも豊かな生活を送り、孤独感や寂しさを軽減させるようにする。

総じて、子供の父母扶養には社会の各方面の協力が必要である。そして社会の高齢者事業を發展させていくべきである。社会の生産力の發展にともなうて、老人医院、養老院、高齢者アパートなどの施設もより拡大させ、さらに改良し、もっと多く、高齢者たちの様々な要求に答えられるようにしていくべきである。

(3) 三世代家族構成の新形態への不適應に対する要求

1982年、ウィーンで国際連合による高齢者問題世界会議が開催された。この会議で発言された内容に、“中国は近代国家を建設するとともに、良い家族関係の形成、ならびに、老齡者問題の解決に対し真摯な態度で取り組んでほしい”“中国をアジアの代表的なモデルとし、世界の高齡者問題の解決のお手本としたい”などがあつた。一般に認められることに、いわゆるアジアのモデル、それは中国の三代に続く伝統的な家族構造で、このような家族構造は多くの国家に受け入れられ認められてきた。“シンガポール総理李光耀は中国文化の影響を受け、また西洋の教育を受け、各種の方法を比較し、三世代同居家族モデルは高齢者にとってとても有益であると認めている”(鄭学志 1994⁷⁾)。

我が国の古来からの養老と敬老の精神は伝統的な

美德である。しかし、計画出産の普及にともない、社会の人口流動の加速は人々の思想観念を大きく変えていき、そのためかつての形態の家族構成は社会に合わなくなりつつある。三世代同居家族構成の提言は、一人っ子とその老父母にとって非常にむずかしい問題を含んでいる。計画出産は我が国の基本国策である。国民一人一人の素質を向上させ、優生、少生、優育を必ず実行し、今後一定の期間は一組の夫婦に一人の子供をという提言を続けていかなければならない。我が国の都市部ではすでに年齢に達している青壮年層夫婦の95%以上が‘独生子（一人っ子）証’を受け取っている。もし伝統的な三世代同居家族を提言するのであれば、一人っ子同士が結婚したあと、ただその半分の一人っ子の父母だけが三世代同居の楽しさを享受できる。だが、他の半分の父母たちは不公平だと感じ、憤りや焦燥感が生まれ、子供たちに対して不満を抱いてしまう。そして双方の心理的負担が増加していくであろう。三世代同居と一人っ子についていえば、50%の実現の可能性しかない。現在の実際の社会の発展状況に照らしていけば、今後核家族の方がますます増えていくであろう（子供が独立し小家庭を形成した後、老父母たちも小家族となる）。経済条件、住居条件が改善されてゆけば、人々の要求もさらに多種多様化していくであろう。しかも、核家族は大家族に比べ人々の要求の内容も様々である。そのため、“(四二一)”式三世代同居家族の解体も必須のことであろう。

現在、都市部では核家族の一種の変形した形として新しい家族構成ができていく。高齢者の小家庭を中心とし、子供の家庭をその末端として構成する“お互い最も独立した形、しかし頻繁に行き来し、お互いに面倒をみあい、休みの日には一緒に団欒する”，このようなネットワーク式の家族構成、このようにつかず離れずの新しい関係の構成は次のようにまとめられる。；①居住関係、生活上の世話もつかず離れずの距離で行う②経済上の関係もある程度の距離をもってつきあう③感情的にも近づきすぎず、離れすぎずに；このような家族モデルには多くの長所がある。；主要家庭や連合家庭のような住居の窮屈さを避け、二世代から三世代の生活方式、習慣の違い、趣味の差、思想観念の違いなどから家族内におこる衝突やあらそいを避けることができる。；また、我が国固有の敬老愛幼の精神、お互いをいたわるとい

うよい慣習も保持でき、共に楽しく過ごし、小家族化した後の父母たちの病気のときの介護や、生活の寂しさ、精神的な欠乏と空虚感を補える。若い世代、高齢世代ともに普遍的に人々に受け入れられて来たのは、一種の高齢者の心身の健康に対し有益な環境である。この種のモデルは、社会の発展にも順応し、また今後大量に出現するであろう。

計画出産政策の実施及び改革開放後、人々は大量に流動し、身内に頼れなくなっ高齢者も必然的に増加した。このような高齢者たちについて言えば、とくに次の世紀の高齢者たちに言わせてもらえば、これからはますます多くの人々が、このような問題を抱えて行くようになるのは疑いのないことである。そのため、家庭内での扶養の問題を重視するとともに、社会もこの問題に対する具体的な対策を早急につけて、我が国の国情にあった“扶養”の路をみつけなければならない。これは家庭と社会と両方をともにあわせて考えて行くことが必要であり、社会主義の初級段階の経済基礎に合わせていくだけでなく、我が国の伝統的な道徳観念も取り入れて行くことが必要である。そしてさらに必要なことは次世代の我が国の社会的発展及び人口構造の特徴に適合させて行くことである。

むすび

(1) 家庭構造は、社会経済、文化伝統、心理的要素などの制約を受ける。高齢の両親と、自分達の家庭をもった子供達の同居と別居は、それぞれ良いところと欠点とがある。本研究で得た資料が明らかに示しているところでは、子供側の傾向と、両親側の傾向は明らかにわかれていて、心理学の角度から見れば、別居は双方の心に安定をもたらす、そしてそれは特に高齢の両親側について言える。なぜなら彼らの柔軟性は、若い人達のそれよりもずっと低いからである。

(2) 老父母たちと同居するにしろ別居するにしろ、子供には必ず親を扶養して行く義務がある。都市部の退職をした高齢者たちには、すべて一定の経済的保障がなされている。健康管理についての条件もよく整っている。高齢者たちは、精神上のやすらぎと関心を多く求めている。これをもって、帰属、尊重欲求を満足させるのである。

(3) 年齢が高くなるにしたがって、高齢者の体力

はだんだん衰えてゆく。生活においても人の助けが必要になってくる。社会は高齢者事業の発展、高齢者サービスの実施、高齢者文化センターの類いの機構を充実させて行く必要がある。それは一つの方面では子供の心的負担、実際の負担を減らすということ、もう一つの方面では高齢者たちを家庭という“小世界”から外の世界に目を向けさせ、社会と多くの接点をもち、文化的にも豊かな生活を送り、孤独感を軽減させるという役割がある。

(4) 当世の人々の家族構造の主観的傾向から、都市部の住居建設についての方面を建議すれば、三世同居の住居以外、核家族の生活に合うような住居の建造を考慮してもいいのではないであろうか。あるいは、同居も別居も可能な組み合わせができるような家庭住居を建造してゆけないであろうか。

文 献

- 1) 陳 政寛 他：台湾地区における家族形態の変遷と高齢者の居住の研究，高齢者と家族，上海科普出版社，1992
- 2) 時 蓉華：嫁姑関係の社会心理的分析，老年学雑誌，第1巻，1986
- 3) 時 蓉華：老夫婦関係の社会心理的分析，高齢者仲間の友，第6期，1986
- 4) 時 蓉華：父母，子供，兩世代の関係，老年学雑誌，第3巻，1988
- 5) 家庭編集部：婚姻家庭探索，広東人民出版社，1986
- 6) 劉 炳福：家庭構造と高齢者扶養問題，老年学文集，1986
- 7) 鄭 学志：我が国伝統家庭形式が高齢者の健康に与える影響，上海老齡科学，第1期，1994